

ナーラーヤナ・ティールタ・アーラーダナーの成立と変遷

— フィールドからの報告 —*

小尾 淳 **

A Study on the formation and the transition of the Narayana Tīrtha Āradhana

-- Reports from the Field --*

Jun OBI **

This paper focuses on the formation and the transition of the Narayana Tīrtha Āradhana (NTA) in Tanjavur, Tamil Nadu. In recent years, the *aradhana* with music concerts which worship saint composers such as Thyagaraja are held not only in South India but even in South Indian community abroad. I treat those as a kind of social phenomena here (*aradhana phenomena*). Though Narayana Tīrtha holds a prominent position in some traditional performing arts in South India, his works have been less acknowledged in Carnatic music concerts than those of other composers. Besides, the NTA has a shorter history than other *aradhanas*. It can be said that NTA is located on the margin of *aradhana phenomena*. Even with the above disadvantages and controversial points, the organizer Venkatesan, to some extent, has succeeded in establishing the public images of NTA in Carnatic music society recently. How did he carry it out? To answer this question, the paper gives first a detailed description of the history of the NTA and then takes the present situation of it into consideration.

1 はじめに

本稿は、現在、インドのタミルナードゥ州タンジャーヴール県で行われている、楽聖ナーラーヤナ・ティールタ Narayana Tirtha (1675?-1745?) (以下、NT) のアーラーダナー *aradhana*¹

* 本稿は、2010年5月15日に行われた、NIHUプログラム「現代インド地域研究」東京外国語大学若手研究セミナー「南アジア芸能からみる現在」で発表した「伝統の担い手の資質—南インドにおけるアーラーダナーの事例を中心に—」の内容に加筆修正したものである。

** 大東文化大学大学院博士課程後期課程

¹ 本稿に現れるインド系言語にはサンスクリット語、タミル語、テルグ語などがある。これらの言語は、原

(以下、NTA)の成立と変遷について、詳細に論述することを目的とする。

NTは17世紀後半にアーンドラ地方に生まれたとされるテルグ・バラモンであり、インド各地を巡礼した後、タミル地方に南下し、長編サンスクリット劇『クリシュナの遊戯の波 *Krsna-lila-taraggini*』を書いたといわれる。

現在、楽聖のアーラーダナーは、楽聖の命日に、儀礼とその前後におこなわれる音楽演奏や芸能が一体化した祭りのことを指す(以下、本稿での「アーラーダナー」はすべて楽聖のアーラーダナーを指す)。ここでいう楽聖とは、西洋の「作曲家」とは異なり、詩人であり、また、哲学者・思想家であり、各地を巡礼する、聖者と見做される者で特に音楽的感性を評価されていた人のことである[ラーガヴァン 2001: 5-8]。

その先駆けとなったのは1847年から100年以上に渡って続く、南インドを代表する楽聖、ティヤーガラージャ Tyagaraja (1767-1847)のアーラーダナー(以下、TA)である。開催地であるタミルナードゥ州タンジャーヴール県ティルヴァイヤール Tiruvaiyaru は、カーヴェーリ河に隣接する閑静な村であるが、今日、TAの開催期間中は数千人もの音楽愛好家が訪れ、大変な賑わいを見せている。この影響を受け、近年、インド国内のみならずアメリカやイギリスなどの西欧諸国をはじめ、南インド系移民コミュニティが存在する世界各地で楽聖のアーラーダナーが見られるようになった。その多くはTAの形態を雛形として模倣したものと考えられる。TAを研究した井上貴子は、世界に広がるTAを「グローバルな現象」と述べた[井上 2006: 491]。

本稿では、井上の論に依拠し、これを一種の社会現象(以下、アーラーダナー現象)として捉え、その周縁に位置するアーラーダナーのひとつであると思われるNTAを事例として取り上げる。

NTAが「周縁に位置する」とした理由として、次のようなことが挙げられる。

第一に、NTAはTAが盛んに行われるようになってから開始された、「亜流」のアーラーダナーのひとつである。開始時期は1965年と比較的新しく、知名度、集客力もTAや他のアーラーダナーと比較すると著しく低い。

第二に、NTの南インド古典音楽(以下、カルナータカ音楽)界での位置づけである。彼の楽曲はタランガム Tarangam と総称され、アーンドラ地方発祥の伝統舞踊クーチプーディ Kucipudi や主に南インドで盛んなくつかの宗教芸能において重要な位置を占めているが、一般のカルナータカ音楽の圧倒的なレパートリーを占める三大楽聖、すなわちティヤーガラージャ、ムットゥスワーミ・ディークシタル Muttusvami Dikshitar (1775-1835)、シャーマ・シヤーストリ Zyama Zastri (1762-1827)や他の楽聖²と比較して確固たるイメージに乏しく、コ

則として初出のみカタカナ表記の後にローマ字表記を記し、2回目以降はカタカナ表記のみとする。表記法に関しては、『南アジアを知る事典』[辛島他 1992: 930-931]に従った。

また、本稿で扱う校訂されたテキストが多言語の文字表記の場合、校訂者序文や翻訳などに用いられている言語の文字のローマ字表記を採用する。同じ語が異なった言語で用いられる場合のローマ字表記の選択に関しては、基本的な音楽用語はサンスクリット語を、テルグ語芸能に限定される場合には該当する言語を随時選択する。なお、近現代の地名・人名では、原則的に上記の表記法によらず、現地綴り、本人による綴りを補助記号なしのローマ字で示す。日本語のカタカナ表記が定着していると思われる地名についてはローマ字表記を省略する。

² 例えば、ティルマラ・ティルパティ Tirumala-Tirupati (現アーンドラ・プラデーシュ州チットウル県)の

ンサートで演奏される頻度も少ない。

第三に、行われているアーラーダナーの数である。他の楽聖のアーラーダナーは、いずれも国内外を問わず複数確認されているが、NTAは筆者が調査を行った事例以外にはごく小規模なものが1つ行われているだけである。

しかし、以上のような周縁性を持つにも関わらず、NTA近年、カルナータカ音楽界に定着しつつあり、それに平行してNTの存在感も増してきたといえる(後述)。それは主催者であるヴェンカテーシャン V. Venkatesan (1936-) に拠るところが大きい。彼はどのように知名度の低いNTの楽曲を世に広め、NTAを定着させてきたのだろうか。

次に先行研究について述べる。NTを取り上げた先行研究については、ラーガヴァン V. Raghavan (1908-1979) が筆頭に挙げられる。彼は早くからNTの作品に注目し、1941年にタンジャーヴール県のメラットゥール村で『パーリジャータ花の奪取 Parijatapaharanam』という未完の貝葉マニユスクリプトを発見し、彼の足跡を明らかにしようと試みた[Raghavan 1942]。また、クリシュナムルティ R. Krishnamurthy は、17世紀前半から18世紀後半に、ナーマ・シッダーンタ Nama-Siddhanta³ の教義を唱えた、タミルで活躍した5人の聖者の一人として、NTを紹介している[Krishnamurthy 1979]。ナタラージャン B. Natarajan はタミルとアーンドラ、それぞれの先行研究者によって偏りがちであったNT像を客観的に分析したほか、『クリシュナの遊戯の波』のテキスト全文を英訳した[Natarajan 1988,1990]。サンバムルティ P. Sambamurthy は、カルナータカ音楽教育の現場で広く読まれている著書の中でNTを取り上げ、特にタミルで、ある一定のNT像を定着させることに貢献した[Sambamurthy 2004]。NTの関連する南インド古典芸能を語る上で重要な、古都タンジャーヴールの芸能ならびにアーラーダナー現象の発端となったTAに関しては、井上の著書において詳細に論じられている[井上 2006]。NTAについては、これまでほとんど研究されてこなかったが、主催者ヴェンカテーシャンが、NTAの開催場所をめぐる論争(後述)があった際に、開催の経緯や変遷を公にし、その意義を主張する目的で記した個人文書[Venkatesan 1994]に詳しく述べられている。そのほか、インドの主要新聞『ザ・ヒンドゥーThe Hindu』やインド音楽雑誌『シュルティ Sruti』にもNTAにかんする記事が見られる。『シュルティ』にはインド国内外のアーラーダナーの動向に関しても毎年多くのレポートが掲載されており、批判的に報告されるものも多い。また、グローバル化するアーラーダナーについては各団体のウェブサイトも参照した。

しかし、NTAの成立と変遷について客観的に詳細を記したものはまだない。本稿では、これらの先行研究を参考にしつつ、2005-2007年に行った現地調査で収集した資料や情報にもとづいて報告する。

本稿の構成は、まず、第2節で楽聖のアーラーダナーについて簡潔に述べるとともに、アーラーダナー現象の歴史的背景を確認する。次に、第3節でNTの生涯、作品、関連する芸能について概観する。続く第4節では、NTAが開始された経緯とその内容について詳細を述

ヴェンカテーシュワラ Vegkatezvara 寺院と結びつきが深いアンナマーチャーリヤ Annamacarya

(1408-1503) や、「カルナータカ音楽の父」と称されるプランドラダーサ Purandaradasa (1489-1564) などのアーラーダナーは国内外で複数の団体によって行われている(付表3)。

³ ナーマ・シッダーンタとは、ナーマ、すなわち神の名前を唱えることで、罪が消え、健康や豊穡が与えられ、最終的に精神の解放が得られるという思想[Krishnamurthy 1979: 20]。

べる。最後に、結びとして NTA をアーラーダナー現象全体と関連付け、NTA の変遷過程がもつ意義を考察したい。

2 アーラーダナー現象について

アーラーダナーとは、字義的にはヒンドゥー寺院などで神に対しておこなわれる特別な「礼拝式 service」の意である。通常のバラモンの家庭祭式では、死者に対して、命日にシュラーツダ *zraddha* (祖霊祭) と呼ばれる儀礼がおこなわれる[井上 2006: 491]。しかし、ティヤーガラージャのように死の直前に解脱し、死をもって解脱したと信じられている者は神聖視され、神と同様にアーラーダナーがおこなわれる[ibid.]。その中でも、生前音楽家だった者は楽聖(音楽の聖者)と見做され、その弟子や信者によってアーラーダナーが執行されるようになった。

カルナータカ音楽にはグルクラム *gurukulam* とよばれる典型的な師弟伝承制度の伝統があり、アーラーダナーは本来であれば弟子によって行われるべきものである。しかし、ティヤーガラージャは非常に多くの弟子を育てたため、伝承が弟子から弟子へと広がった。弟子たちは師弟伝承により派閥をつくり、それぞれが正統性を主張し、司祭権をめぐる対立した。さらに、最終的には正統な継承者でなくとも「信者」であれば誰でも行うことが可能となった⁴。これについて、井上は、TA は 19 世紀末以降の音楽協会の設立が発端となった音楽芸能の「民主化」の典型的な例として、「担い手」の「民主化」を実現したと論じた[ibid.: 544]。

TA や NT に関連の深い芸能が育まれてきたタンジャーヴール地方は、ヴィジャヤナガル王国 (1336-1649) ⁵やマラーター王国⁶などのタミルにおける根拠地となり、タミル伝統文化の中心地の一つとして栄えた古都である。ナーヤカ時代にはヴィジャヤナガルの文化がもたらされ、テルグ語とサンスクリット語の芸能が新たな展開を遂げた。また、マラーター時代には西インドの文化がもたらされ、ナーヤカ時代の文芸が引き続き保護されたばかりでなく、タミル語やマラーティー語による文芸も育まれた[井上 2006: 407]。マラーター宮廷には多くの詩人や楽師たちが集い、歴代の王は芸術文化をよく保護しただけでなく、自ら多くの作品を残した。

⁴ 1921 年にバンガロール出身の著名デーヴァダーシー、ナーガラトナンマール *Bangalore Nagaratnammal* が、夢でティヤーガラージャの顕現を見て、サマーディ(埋葬地)の寺院建立に着手する。1926 年にナーガラトナンマール派が創設され、彼女が TA に介入することで女性音楽家の参入や派閥対立からの脱却など、TA に重要な局面が訪れた[井上 2006: 503-509]。

⁵ 14 世紀初めからイギリス東インド会社の侵入までの約 300 年間、南インド一帯を統治したヒンドゥー王国。タミル地方統治のためヴィジャヤナガル本拠地から送り込まれた、ナーヤカと呼ばれる武将たちは知行地を与えられ、封建領主的権力を確立していき、17 世紀初頭に、大きな勢力となった。度重なるイスラムの侵攻により、ヴィジャヤナガル王国は 1649 年に滅亡する。イスラムはさらに南下し、タンジャーヴールやマドゥライにも侵攻してきたため、各地のナーヤカは周辺の領主・王侯たちと複雑な同盟関係を結びながら攻防を繰り返した。

⁶ 次期後継者をめぐって複雑な攻防が行われた末、最終的には、直接関係のないビージャプル *Bijapur* 王国のスルターンに派遣されたエーコージー *Ekajji* (ヴェンコージー *Vegkoji*) (在位 1676-84) が、タンジャーヴールを無血開城し、1673 年、ナーヤカによるタンジャーヴール支配は実質的に終わる。エーコージーは中・西部デカン地方を中心として勢力を誇ったマラーター王国 (1674-1818) を創建したシヴァージー *Zivaji* の異母兄である。

タンジャーヴール・マラーター最後の王、サルフォージーSerfoji 二世（在位 1798-1832）も、芸能を手厚く保護したことで知られる[ラーガヴァン 2001: 84]。1799年にイギリスと条約を締結したあとは、ごくわずかな土地と支配権のみが割譲され、王は有名無実となり、タンジャーヴール・マラーターは政治的権力を失っていく[Subramanian 1988: 73]。しかし、このことにより、かえって王は文化摂取に時間を費やし、音楽ホールや図書館を建設し、宮廷を学びの殿堂にしたという[ibid.]。現在に至るまでカルナータカ音楽界に影響を及ぼし続けている三大楽聖はこの時代に活躍したため、18世紀後半から19世紀後半は「カルナータカ音楽の黄金期」と後世に呼ばれている。なお、この根底には、7-9世紀におこったバクティ運動にはじまる歴史的背景があることも付け加えておきたい。

19世紀中葉にイギリスの直接統治下に入ると、宮廷音楽家たちの活動場所は宮廷などの私的な場所からコンサート・ホールに移り、歌いながら家々をまわって托鉢をして歩く楽聖の時代は徐々に幕を閉じる。カルナータカ音楽は映画などメディアの発達とともに南インドの大衆文化に深く浸透し、醸成されていった。現在、毎年12月に行われるチェンナイの音楽シーズン⁷に代表されるように、南インド各地では年間を通して非常に多くのコンサートが行われている。

以上のような歴史的・社会的背景が、アーラーダナー現象の受け皿になったといえるだろう。

TAは、毎年1月、ティヤーガラージャのサマーディ *samadhi*（埋葬地）の前で、命日を含む約1週間に渡って行われる。その模様は国営テレビ Doordarshan や全インドラジオ放送 All India Radio などでも放送されるほか、近年ではインターネットを通じて多数の動画が配信されている。音楽祭に欠かせない部分となっている『ガナラーガ・パンチャラトナム *Ghanaraga Pajcharatnamu*（ガナラーガによる5つの至宝）』⁸の唱和、女性の音楽家の参加⁹、信仰やカーストに関係なく誰でも自由に参加できるなど、多くの点において音楽界に変化を生み出した[井上 2006: 452-545]。一方、マスメディアに注目されることによる過度な広告や、儀礼よりも華やかな音楽祭に重点がおかれた形骸化する TA の傾向を憂う意見も後を絶たない[Sruti 2008: Issue284,16]。

TA はカルナータカ音楽界に影響を及ぼし続け、アーラーダナーだけでなく、生誕祭に音楽祭を付加するといった TA を雛形とした同様の企画がタミルナドゥ州を中心に、非居住インド人（NRI）の増加と共に海外でも数多く見られるようになった。主催者の意図は様々であるが、特に海外の場合は、母国の伝統文化を伝承する絶好の機会としてコミュニティの拠り所となっている様子が多く確認できる。その筆頭として、1978年に開始された、アメリカのオハイオ州クリーヴランドの TA¹⁰が挙げられ、現在では本家の TA を凌ぐ大規模な TA として知られている。本稿では紙幅の都合上、事例の詳細は省略しアーラーダナー現象の一

⁷ 1928年にマドラス音楽アカデミー Madras Music Academy が開始し、徐々に他の機関を巻き込んでいった。現在ではチェンナイ市内、約30の機関や劇場が音楽シーズンを支えている。

⁸ ティヤーガラージャはいくつかのパンチャラトナム・クリティ（5曲組のクリティ）を作曲しており、その中でもガナラーガと総称される、5つのラーガ（ナータ *Natha*、ガウラ *Gaula*、アーラビ *Arabhi*、ヴァラーリ *Varali*、ラーガ シュリー *Raga Zri*）で作曲されたものが最も有名である。

⁹ 注4参照。

¹⁰ <http://www.aradhana.org/>（2011年2月18日閲覧）。

部を表にまとめた（付表 1-3）。

3 NT について

3-1 NT の生涯

次に、NT の生涯について簡潔に記しておきたい。先述のように、彼の人生にかんする史料は乏しく、生没年時期、出生場所、彼が巡礼で訪れた場所、そして解脱したとされる場所に至るまでのエピソードに、タミルとアーンドラの各研究者により見解の不一致が見られるが、ここでは主に筆者が調査を行った、タミルで一般的に定着している説を中心に述べる。

NT の生没年に関しては 1675-1745 年説が一般的に定着しており、出生場所については、アーンドラ地方のカザ Kaza またはクチマンチ Kuchimanchi（現ゴードヴァリ Godavari 県）のタッラーヴァジャラ Tallavajhala というバラモン一派に属していたという説が定着している。ここでは、少なくとも 20 世紀半ばまではタランガムを暗誦する慣習が残っていたという [Natarajan 1988: 152]。彼は幼少のころから学習に長け、『バーガヴァタ・プラーナ *Bhagavata purana*』¹¹ を学び、ジャヤデーヴァのアシュタパディ *astapadi*¹² を好んだといい、それらは彼の作品に反映されていることから明らかである。

彼は若年で結婚し、その後出家してサンニヤーシン *sannyasin*（現世放棄者）に至ったとされ、次のようなエピソードが伝えられている。NT の妻の実家はタンジャーワールのヴェンナール Vennar 川対岸にあり、彼がいつものように泳いで渡ろうとしたところ、急流に飲み込まれた。命の危険を覚え、サンニヤーシンになることを決意し、聖紐を取り去ると、剃髪の代わりに毛髪を抜き、適切な真言を唱えサンニヤーシンになったというものである。

彼の作品にはオリッサ地方プリーのジャガンナート神、アーンドラ地方ショーバナードリ Shobhanadri、ヴェーダギリ Vedagiri のナラシンハ神などの記述が見られ、アーンドラ地方には彼の伝承も残っている [Jackson 1994: 143]。

もう一つの有名なエピソードは、NT は晩年に深刻な腹痛を患い、ティルパティのヴェンカテーシュワラ寺院に詣でたが、神の託宣に従ってタミルに南下したというものである。ヴィシュヌ神の化身である聖なる猪の導きに従い、V 村のヴェンカテーシュワラ寺院の中に入っていったところ、彼の苦痛は治まったという。腹痛が癒えたことから、クリシュナ神のより熱心な信者となった NT は、クリシュナ神の遊戯を主題にした執筆活動を始めた。ヴァラフル Varahur 村（以下、V 村）¹³ のヴェンカテーシュワラに捧げた作品であることが、作品の歌詞からも明らかであり、同村で執筆したという説が定着した。

¹¹ ヴィシュヌ神をバガヴァットという名で信仰するバーガヴァタ Bhagavata 派のヒンドゥー教徒の根本聖典。全 12 巻約 18,000 の詩句から成っている [菅沼 2002]。

¹² 12 世紀、ベンガル地方の詩人ジャヤデーヴァによって書かれた、牛飼い姿のクリシュナ神と牛飼い女ラーダーとの恋愛模様を官能的に描き出した『ギータ・ゴヴィンダ *Gita Govinda*』の中の各曲 [井上 2006: 385]。

¹³ V 村はタンジャーワール県ティルヴァイヤール郡に属し、同郡中心部から南西 15 km のカーヴェーリ河の支流であるクダムルティ Kudamurti 川沿いに位置する。クリシュナ神の聖誕祭に行われるウリヤディ Uriyadi 祭（壺取りの祭り）が有名である。

彼は執筆を終えた時点でクリシュナ神の顕現を得たため、それ以降創作は行わず、V村にしばらく滞在した後、タミル暦マーシ Maci 月の白分の8日(2-3月頃)に解脱したと言いつたえられる。場所に関しては、V村説のほか、同村近郊のティルプーンドゥルティ Thirupoonthuruti 村(以下、T村)にある小さな寺院の、マンゴーの木の下で瞑想に入り、そのまま解脱したと言いつた説があった。T村のNTAが有名になるにつれ、T村説が一般的となった。しかしNTがT村に滞在したかどうかは、未だに解明されていない上に、この寺院にもともと祀られていたのは、名前が似たシヴァ派の聖者ティールタ・ナーラヤナ(後述)であることを付け加えておく。

3-2 NTに関連した芸能

次に、NTの作品とそれらが関係する芸能について述べる。NTはカルナータカ音楽史上、三大楽聖の前時代に位置する。彼らは音楽と歌詞、両方を手がけ、また自身でも歌った作曲家として、特にヴァーグゲーヤカーラ *vaggeyakara* と呼ばれるが、NTの場合はティヤーガラージャのように弟子によって当時の曲が後世に伝承されてこなかったため、歌詞のみが残っており、現在歌われているものは、ほぼ、後世の作曲家によるものといつてよい。音楽的側面では、三大楽聖以降の曲は歌詞の内容に加えて技巧が楽曲全体にちりばめられ、高い芸術性を伴うのに対し、それ以前の曲は概して、宗教音楽として歌詞の内容が重視される傾向にあるのが特徴といえる。したがって、コンサートではメインというよりは小曲として扱われることが多い¹⁴。

『クリシュナの遊戯の波』は、『バーガヴァタ・プラーナ』の第10巻ダシャマ・スカンダ *Dazama Skanda* の縮約版であるといわれる。物語にはヴィシュヌ神がクリシュナの化身となって地上に誕生してから、クリシュナとルクミニの結婚までが描かれている。この作品は文学的にも評価が高く、NTによってサンスクリット歌劇は完成の極致に達したとさえいわれた[Sambamurthy 1984b: 329]。

周知のように、クリシュナの物語は数あるインド神話の中でも最も好まれる題材のひとつであり、『ギータ・ゴーヴィンダ』をはじめとして多くの作品のモチーフとなつてきた。NTはジャヤデーヴァの影響を大きく受けているとされる。作品が12サルガ *sarga* (章)に倣つて、12タランガから構成されていることもその1つであるという。しかし、各タランガに含まれる曲数は、『ギータ・ゴーヴィンダ』と比較して圧倒的に多く、少なくとも十数曲にのぼる[井上 2006: 578]。作品には様々な音楽形式が含まれるが、ひとつひとつの曲は形式に関係なく「タランガム」と総称される。

しかしながら、現在「タランガム」というと、カルナータカ音楽コンサートで演奏される楽曲よりも、クーチプーディ舞踊で、単独のレパートリーとして踊られる作品として知られている。これは、歌詞のついた曲を踊ったのち、口唱歌に合わせて、丸い真鍮の盆の上に乗って踊るアクロバット性の高いものである。

¹⁴ 現在行われている、一般的なカルナータカ音楽のコンサートでは、約2-3時間に様々な形式の楽曲が演奏される。メインとなる楽曲には通常、即興演奏や伴奏楽器の演奏を含めて約1時間前後がかけられ、そのほかに様々な形式の楽曲や小曲が演奏される。

クーチプーディ舞踊と NT の関係は作品だけではない。同舞踊の創始者といわれるシッデーンドラ・ヨーギ（13-14 世紀？）は神聖化され、多くの伝説を残しているものの、その存在を確認する手段がないのが現状であるが、彼が NT の弟子であった、あるいはシッデーンドラ・ヨーギと NT は同一人物であったという説も存在する[Natarajan 1988: 203-211]。しかし、彼と NT を結びつける証拠はないに等しい[井上 2006: 632]。

また、クーチプーディ舞踊が深く関連する芸能としてバーガヴァタ・メーラ Bhagavata Mēla がある。1532 年頃から 1700 年頃にかけて、多くのテルグ・バラモン家族がクーチプーディ村からメラットゥール Melattur 村に移住し、アチュタツパ・ナーヤカ Acyutappa Nayaka の庇護を受け、盛んに上演が行われた。[Natarajan 1988: 212]。その最初の上演作品が NT の『クリシュナの遊戯の波』であったという説もあり、彼が指導にあたったとも言われるが[Natarajan 1988: 212]、近年 NT の作品は上演されていない。

他に、NT と関係の深い芸能として、バジャナ・サンプラダーヤ Bhajana Sampradaya がある。先述のように NT が生きてとされる17-18世紀は、タンジャーヴール・マラーター時代の最盛期であり、歴代の支配者たちは不二一元論¹⁵を信奉し、音楽文化のよきパトロンであった[ラーガヴァン 2001: 84]。この歴史的背景を受けて発展した、最も代表的な宗教芸能の筆頭であるバジャナ・サンプラダーヤとハリカターHarikatha¹⁶は、マハーラーシュトラ地方で育まれた、歌を交えて民衆に教えを説くキールタンと呼ばれる様式の影響を受けて生まれたものである[井上 2006: 416]。バジャナは主に少人数のテルグ語を母語とする不二一元論学者や音楽家によって育まれ、そのうちの何人かは NT をはじめとするサンニヤーシンであった。現在のバジャナの様式は18-19世紀に確立したとされ、元となったキールタンとは異なるが、タミルを中心に定着しており、NT の作品はティヤーガラージャやジャヤデーヴァのレパトリーと並んで、バジャナの演奏会ではおなじみである。

以上のように、NT の生涯にまつわるエピソードと音楽界における関連事項を概観してみると、NT の楽曲はカルナータカ音楽界の一端を担ってきたものの、大きな影響力があったとは言い難い。コンサートでの演奏頻度は低いが、いくつかの芸能で重要な位置を占めてきたといえよう。特に、クーチプーディ舞踊の「タランガム」は NT の名を超えて非常に認知度が高く、独り歩きしている状態である。したがって、NT は「タランガム」と関係の深い伝統芸能以外では知名度が著しく低いといわざるをえないだろう。

4 NTA について

4-1 寺院をめぐる論争

現在、NTA が行われている T 村は、TA が行われているティルヴァイヤールと同じ郡に属し、2007 年現在、およそ 8,400 人が居住している（筆者調べ）。村に伝わる伝承によると、同

¹⁵ インド哲学派の主流を成すヴェーダーンタ学派中の最も有力な、シャンカラ Zagkara (700-750 頃) を開祖とする学派。サンスクリット語でアドヴァイタ Advaita と呼ばれる[辛島ほか 1992: 635]。

¹⁶ 歌と語りによって神の物語を伝える様式。カター・カーラクシェーパム Katha kalaksēpam とも呼ばれる[井上 2006: 110]。

村は 7-8 世紀ごろにすでに存在していたという。シヴァ派の聖者に縁の深い寺院が多く、主な祭礼はシヴァ神に関連している。NT のジーヴァ・サマーディ¹⁷が祀られているとされる寺院の管理人によれば、およそ建立後 500 年とのことであったが、はっきりとした建立年はわかっていない。先述のように、この寺院には本来、別の聖者が祀られていたことがナタラージャンの調査からも明らかである[Natarajan 1988]。寺院がある土地は現在、南インドのシヴァ派に属する僧院のひとつ、クンドラックディ・ティルヴァンナーマライ・アーディーナム *Kunṛakkuti Tiruvannamalai atinam* の管理下におかれており、アーディーナム側は、この寺院はシヴァ派の聖者ティールタ・ナーラーヤナ *Tirtha Narayana* を祀ったものであると主張する [ibid.: 99]。一方、NTA を主催するヴェンカテーシャンは、NT の死後、およそ 100 年間は村民が寺院で日常的にアビシェーカ *abhisēka* (灌頂) などの儀礼を行っていたと述べ、あくまでも NT の寺院であると主張する。NTA が開始される際に、この名前が酷似している 2 人の聖者、ヴィシュヌ派の聖者 NT と、シヴァ派の聖者ティールタ・ナーラーヤナが混同されたのであった。寺院の近隣の住人によれば、村民はもともとその聖者を NT ともティールタ・ナーラーヤナとも認識しておらず、グル・ナータ *Guru Natha* (聖なる導師) と呼び、病気や願掛けなどの時に頻繁に訪れていたという。おそらく地元の守護神的存在を祀る祠であったのだろう。

以上のように、名前が酷似している 2 人の聖者 (写真 1、2) が混乱され、現在でも寺院の権利の正当性をめぐる議論は決着をみていない。寺院の内外にも混乱が表れている。寺院内の最も奥には、「ティールタ・ナーラーヤナ」と記された、年代を経た石碑が設置され、長い髭を蓄え、髪の毛を高く巻き上げた姿をした人物の肖像画が頭上に掛けられている。一方、寺院内部の側壁面には、ヴェンカテーシャンがティルヴァイヤールにあるティヤーガラージャのサマーディに倣って、1993 年より 3 回に渡り NT の 67 曲のタランガムを大理石に刻印させた、石碑が設置されている。しかし、NT の肖像画は寺院内では確認できなかった。

なお、(写真 1) のような、今日一般的に定着している NT の肖像画は、ヴェンカテーシャンをはじめとする、NTA 実行委員会が NTA 開始後に印刷したものであり、一般の人々はこれによって NT を視覚的にイメージしていることにも注目すべきだろう。

以上のことは既に公にされているものの、一般の参加者は NT の寺院であることに疑いをもっていない様子である。

3-2 NTA の成立と変遷

次に、T 村で NTA が開始されるまでの経緯と変遷過程を、ヴェンカテーシャンによる記録 [Venkatesan 1994] や新聞・雑誌の記事をもとに述べる。

1964 年にヴェンカテーシャンがマドラス音楽アカデミーでコンサートを行った際、当時アカデミー事務局長 (1935-1979) であったラーガヴァンが彼に声をかけ、T 村出身のヴィシュワナータ・バーガヴァタル *Viswanatha Bhagavatar* (?-1959)¹⁸ の息子かと尋ねた。ヴェ

¹⁷ 聖者が解脱した後に埋葬された場所。身体の機能が止まっても肉体は滅びず、魂 (ジーヴァ *jiva*) が残っているとされる。

¹⁸ ヴェンカテーシャンの父、ヴィシュワナータ・バーガヴァタルの詳細については調査がまだ不十分である

ンカテーションがそうだと答えると、ラーガヴァンはさらに、T村にアーンドラ地方の出身の偉大な聖者が祀られていることについて知っているか尋ねたという。ヴェンカテーションは村にある小さな寺を思い出したが、それにまつわる聖者の存在については全く知らなかったという[Venkatesan 1994]。ラーガヴァンは、ヴェンカテーションがT村出身の音楽家であることから、彼が率先してNTA実行委員会を発足し、TAのような、音楽祭を伴うアーラーダナーを行うことを勧めた[ibid.]。

ラーガヴァンは、マドラス大学のサンスクリット学部長（1955-1968）を歴任、サンスクリットおよび音楽学者として、生涯に120以上の著書と1,200を超える論文を記し、1962年にはパドマブーシャン Padma Bhushan（文化褒章）を受賞した、当時のマドラスにおける文化生活の中心的存在であった。彼はインドの伝統芸能の復興に尽力したことでも知られる [Srutī 2010: Issue 307,27-29]。

一方、ヴェンカテーションは3代続く音楽一家¹⁹に生まれ、幼少の頃から父親に音楽の訓練を受け、高名な歌手アマトゥール兄弟 Alatur Brothers の一人であるシュリーニヴァーサ・アイヤル Srinivasa Iyer に師事した後、プロの音楽家として活躍していた。しかし、当時、全インドラジオ放送の階級では最も低いCグレード・アーティスト²⁰に留まっており、音楽家としての地位は低かったといえる。また、長男であることから、音楽活動を行う傍ら、家族を養うためにインド鉄道にも勤めていた。彼はT村を離れていたが、しばしば帰省していたという。彼はラーガヴァンの提案を受けると、村の年長者や実力者から承諾を得て、実行委員会を発足した。彼はT村にあるバラモン居住区の家とアーラーダナーを行うのに十分な土地を所有していたが、先述のように寺院の土地がシヴァ派の僧院に帰属しているという理由で、その司祭であるクンドラックディ・ポンナンバラ・アディガラル Kunrakuti Ponnambala Atikalar を委員長に選出せざるを得なかった[ibid.]。

1965年から本格的にNTAが開始された。当時の資金は8-10ルピー²¹であったという。ヴェンカテーション自身の音楽家としての知名度は低かったものの、高名なバーガヴァタル²²であった叔父や父親の人脈により、センマングディ・シュリーニヴァーサ・アイヤル Semmangudi Srinivasa Iyer(1908-2003)をはじめ、多くの著名音楽家らが参加を承諾した。センマングディは1971年にNTの楽譜出版に携わっている。開始当時は小規模であったが、村の富裕層が50ルピーほど寄付をし、祭礼のほか、6日間、毎日2つのコンサートとハリカタールを行ったという。初日は午前5時から儀礼を開始し、コンサートは午後9時から夜

が、ラーガヴァンがその存在を知っていたことや、NTA開始にあたって著名音楽家らが協力したことなどから、当時、カルナータカ音楽界ではかなり知られた存在であったと推察される。

¹⁹ ヴェンカテーション曾祖父ガナム・ティルマライ・アイヤル Ghanam Tirumalai Iyer（生没年不詳）はタンジャーヴールの宮廷音楽家であり、宮廷の庇護を受けていたという [Srinivasan 2001: 274, Venkatesan 1994]。また、叔父のマングディ・チダンバラ・バーガヴァタル Mangudi Chidambala Bhagavata (1880-1938)は、当時のハリカタール界を代表する演奏家のひとりであった [Srinivasan 2001: 274]。

²⁰ 全インドラジオ放送の所属アーティストに与えられる階級。Cから始まり、B、B-High、A、A-Top まである。

²¹ 1965年当時、8-10ルピーは約600-756円（換算レート: 4.76ルピー=360円）。

<http://fx.sauder.ubc.ca/etc/USDpages.pdf> 参照。小数第2位以下は切り捨て。（以下、同様）

²² 「バーガヴァタル」とは、南インドでバラモン男性の音楽家や役者を指す尊称である [Sambamurty 1984a: 43]。

中にかけて行われた。

次第に NTA の形が整っていったが、継続していくことは決して容易ではなかったという。開始から 17 年後の 1982 年には、6 日間でおよそ 5 万-7 万 5 千ルピー²³がかかるようになり、これまでのように寄付金による乏しい資金だけでは継続不可能であった。経済困難により、実行委員会は 1985 年から NTA を 4 日間に短縮し、さらに 1988 年から現在の形態である 3 日間に短縮した。特に、T 村が遠隔地であることから、演奏家を招聘するための交通費や、約 300 人分の無料給食を賄う資金が不足していた[ibid.]。

度重なる資金不足を解消するため、1986 年、ヴェンカテーシャンは財団をチェンナイに設立した。当時、NTA の資金は有志の寄付に頼っており、しばしばタミルの文学音楽演劇協会 Iyal Isai Nataka Manram やデリーの音楽演劇研究所 Sangeetha Natak Academy から助成金を受けていた[The Hindu 1988.2.26]。彼はスポンサー探しに奔走し、また、参加者や海外在住の知人に年鑑 2,000 ルピーで永久会員になるよう依頼した。

さらに、経済的な問題以外に、大きな問題が 2 つあった。一つ目は先述の寺院問題で、NTA に否定的なアーディーナム側の要請により、実行委員会は長年、「ティールタ・ナーラーヤナ・アーラーダナー」と名乗ることを余儀なくされていた。さらにアーディーナム側は、NTA が年々規模を増していくと、ヴェンカテーシャンたちが寺院のある土地を所有することになるのではないかと危惧し、寺院と土地がアーディーナムに帰属していることを示す看板をつけるという行動を起こした(写真 3)。

二つ目の問題は、タランガムのレパートリーの少なさであった。開始当時は、NT のタランガムは音楽家の間でも知られておらず、演奏上の条件は「タランガムを数曲含んでいること」だけだったため、他の楽聖の作品を歌う歌手がいてもヴェンカテーシャンは、黙認していたという。

1988 年にスター歌手スッブラクシュミー M. S. Subbulakshmi が参加した際、転機が訪れる。NTA で他の楽聖の楽曲が歌われている状況を知った、スッブラクシュミーの夫サダーシヴァン T. Sadasivan が、「誰のためのアーラーダナーか」と強く批判したため、ヴェンカテーシャンはその後一切、タランガム以外の曲を演奏することを禁止した。それは彼にとって非常に大きな出来事であったという。

その後、ヴェンカテーシャンは NTA 以外にも NT 生誕祭やタランガム音楽祭などの関連企画を開始した。また、220 万ルピー²⁴に上る一大プロジェクト予算を組み、数年間かけて T 村にバジャナを行うホールと NTA 参加者のための宿泊施設の建設を企画した。まず、1997 年に村の地主が寄付した土地に 1 階を完成させ、その後文化庁 The Department of Culture (Government of India) から助成金を受け、2000 年に 2 階を完成させた[The Hindu 2003.3.7]。落成式にはイエスダースをはじめとする著名人を招待し、記念碑が設置された。さらに、2003 年には無料給食をふるまうホールを建設し、8 月のクリシュナ聖誕祭に合わせて落成式が行われた。

²³ 1982 年当時、5 万 - 7 万 5,000 ルピーは約 131 万 3,300 - 196 万 9,950 円 (換算レート: 9,45 ルピー = 248,24 円)。

²⁴ 1998 年当時、220 万ルピーは約 695 万 9,800 円 (換算レート: 41,2 ルピー = 約 130,31 円)。

以上のように、徐々にではあるが、ヴェンカテーシャンは NT の存在感を世に広め、建物を建てることによって、T 村と NTA の結びつきを確実なものにしていった。以上の NTA の変遷に加え、NT にまつわる出来事は年表にまとめた（付表 4）。

3-3 NTA の内容

次に、NTA の具体的な内容について、現地調査を基に述べる。

NTA は NT 尊大祭協会 Narayana Tirtha Mahotsava Sabha によって執り行なわれ、チェンナイに母体を置く財団が資金を管理、運営する。NTA で集めた寄付金は T 村の実行委員会に、NTA 以外の催しで集めた寄付金はチェンナイに送付することになっている。NTA には毎年約 30 万ルピーの資金を必要とする²⁵。NTA のパンフレットによれば、永久会員は約 120 名である（2007 年当時）。NTA 実行委員によれば、新たな寄付を行う会員は毎年 30 名程度であるという。NTA の入場料・参加費などは全て無料であるが、最終日の終了時に寄付金を募って回る。TA には自己負担で来る有名アーティストたちも、ここでは交通費、食費、滞在費は財団が負担するほか、アマチュアのアーティストにも交通費程度の心づけ、NT のプロマイドなどが渡される。

出演者はプロ・アマチュアを問わず、希望者は数ヶ月前にヴェンカテーシャンに直接申し込む。採否は協会によって決定される。アーラーダナーの数週間前にプログラムが関係者に送られる。アーラーダナーのプログラムは年によって多少異なるが、例として 2007 年のものを以下に記す。

<1 日目>

8:30 ヴェーダ詠唱

9:15 ビクシャー・ヴァンダナム Bhiksha Vandanam（バラモンへの施しの儀礼）

9:45 サッティヤ・サーイ・バジヤン Sathya Sai Bhajan（真の母の讃歌）演奏

10:00 ティルマライ Tirumarai（タミル語の聖典）詠唱

10:45 ヴィシュヌ・サハスラナーマ Visnu Sahasranama（ヴィシュヌの千の称名）詠唱

12:00 バジヤナ・サンプラダーヤ演奏

13:00 昼食

14:30 アンドラの伝統的タランガム演奏

15:30 ナーガスワラムによる「吉なる音楽」演奏

16:30 開会式

17:30 プロの歌手によるタランガム演奏

19:25 ウパニヤースム upannyasam（説話）（写真 4）

21:05 ナーマ・サンキールタナ Nama Sankirtana²⁶（写真 5）

²⁵ 2007 年当時、30 万ルピーは約 855,000 円（換算レート:41,27 ルピー=約 117,64 円）

²⁶ ヒンドゥー教の源である教典ヴェーダは一般の伝承を超えたところにあるため、ヴェーダに正式に書かれたことを明瞭にしたプラナーナの内容を、大衆に要約して聞かせること[Rangaramanuja Ayyangar 1993: 219]で、これらの芸能は識字能力や老若に関係なく受け入れられた。ナーマ・シッダーンタ（注 3）はナーマ・サンキールタナ（唱名）の伝統を生み出した。

<2日目>

- 8:30 子供のグループやアマチュア音楽家によるタランガム演奏 (15分間隔)。
10:30 ハリカター 『ルクミニーの結婚 *Rukmini Kalyanam*』
11:00 ナーマ・サンキールタナ
11:20 中・上級者によるタランガム演奏 (15分間隔)
13:00 昼休み
15:00 タランガム演奏 (30分間隔)
18:15 著名歌手によるタランガム演奏
19:30 ウパンニャーサム
21:05 バラタナティヤム舞踊家による舞踊劇『クリシュナの遊戯の波』

<3日目>

- 8:15 ウンチャヴリッティ *ujcavrtti* (托鉢) を再現した儀式 (写真6)
13:00 昼休み
15:00 アマチュアやプロの演奏家によるタランガム演奏 (15-30分間隔)
19:25 ウパンニャーサム
21:00 タランガム教室のコンテスト受賞者、タランガム普及功労者、アーラーダナー委員会メンバーなどの表彰式 (2007年はイエスダースが全員を表彰)
21:30 一流歌手によるタランガム演奏の全インドラジオ放送中継 (全国プログラム) (写真7)
23:05 アーンジャネーヤ祭 *Ajjaneya Utsavam*²⁷

以上のプログラムの内容について簡潔に説明する。

会場は男性用と女性用の席に分かれている。泊りがけで訪れた参加者は、食事や休憩を挟み、ほぼ一日中会場に留まる。昼間の参加者は他に出演者の子供とその家族、地元の年配者が多く、夜はタンジャーヴール近郊の音楽愛好家、近隣の音楽学校の学生などが仕事や学校の後に訪れる。村民はタミル語のウパンニャーサムや舞踊発表に多く訪れているのを見かける。会場には大音量のスピーカーが備え付けられており、村中どこでも聞くことができる。NTAの開催期間中は、音源販売業者や音楽出版社が出店し、NTの楽曲を扱った音楽CDや楽譜などが入手できる。

1日目早朝、寺院の本尊前で僧侶がガネーシャの祈禱を行う中、女性(ヴェンカテーシャンの家族)が掃き清められた会場内にコーラム *kolam* (吉祥紋)を描く。午前中いっぱい、バジャン演奏や聖典の詠唱が続く。開会式には地元の有力者をはじめ、国内外のカルナータカ音楽関係者などが来賓として招かれる。2007年には音楽のスポンサーとして有名なチェンナイの大手サリー・メーカー「ナッリ *Nalli*」社長クップサーミ・チェッティ *C. Kuppusami Chetti*

²⁷ アーラーダナーと同様の祭礼では必ず行われる。ラーマの忠実な下僕アーンジャネーヤ (ハヌマーン)、すなわち「信徒」の祭である[井上 2006: 526]。

が出席した。2009年にはクリーヴランドのTA主催者のひとりであるスンドラム V. V. Sundaram と、ティルパティ寺院関係者が招かれている。

ウパンニャーサムは特にタミルで発展してきた語り芸である。字義的には「説明する」の意で、演者であるバーガヴァタルは、ヴェーダやプラーナの内容をわかりやすく庶民に解説するとともに、時に歌を交え、時に聴衆を笑わせながら数時間語り続ける。NTAでは、NTのタランガムの歌詞を通じて、『バーガヴァタ・プラーナ』の内容を詳しく解説していた。

2日目はタランガム教室²⁸の生徒の演奏から始まる。生徒は5-6名のグループで演奏する。

3日目の最初に行われるウンチャヴィリッティとは、楽聖が神への讃歌を歌いながら家々をまわり、生計を立てていた様子を再現したものである。楽聖の姿に扮したバラモン男性を中心に、ナーガスワラム奏者と実行委員会のメンバーをはじめ、NTに表敬するアーティストたちがタランガムを歌いながら練り歩く。通常、バラモン居住区からカーヴェリ河支流のクダムルティ川を經由し、サマーディまで戻ってくる。

午後は2日目と同様、南インド各地から訪れた参加者による発表が続く。夜には一流音楽家による演奏があり、会場は満員となる。ラジオ放送の導入は、TA以外のアーラーダナーでは初めてのことである。

5 結び

ここまで、アーラーダナー現象の歴史的背景、NTの生涯、作品、関連芸能、NTAの成立と変遷、およびその内容について述べてきた。ここではまとめとして、NTAアーラーダナー現象全体と関連付け、NTAの変遷過程がもつ意義について考察したい。

TAの成功以降、時流に乗って開始された多くのアーラーダナーには大きな共通点が二つある。一つ目は、著名音楽家のコンサートや参加者の発表会などの「呼び物」が付随していることである。このことから、アーラーダナーは本来の儀礼としての目的を超えて、集客無しでは成り立たない商業的なイベントとなったといえよう。「楽聖のアーラーダナー」と銘打ちさえすれば、ほかのプログラムは自在に組むことができるアーラーダナーは、幅広い層の参加者を呼び込む上でも有利である。

ふたつめは、主催者や参加者が様々な価値を見出すことが可能な媒体であることである。先述のように海外の事例では、コミュニティの拠り所となっているほか、楽聖の作品を通して若者に母国の「伝統文化」を伝承する機会としても有効である。

以上の二点についてNTAが当てはまるか検証してみたい。まず一点目について、NTAでも多くの参加者を呼び込むために著名音楽家のコンサート、無料給食、アーティストへの心付けなどは必須であった。アーラーダナーを大々的に行えば、資金が不足するという悪循環を断ち切るため、1985年、1988年には開催期間を短縮し、寄付だけでは足りない資金を補完するためスポンサー探しに奔走した。

二点目について、ヴェンカテーシャンはNTA開始当初、音楽家としての地位が低かった。彼が難題にもかかわらずNTAに価値を見出し、主催者としてカルナータカ音楽界に確固た

²⁸ ヴェンカテーシャンが、タンジャーヴールの音楽教師に依頼して開講しており、市内に2箇所ある。

る地位を築いたことは明白である。

以上のことから、NTAは「亜流」のアーラーダナーと変わらないといえる。ただし、NTAが他のアーラーダナーと異なる点は、開始当初から「知名度の低さ」を克服しなければならなかったことである。ヴェンカテーシャンはNTAを通じて、数十年にわたってカルナータカ音楽界でNTの存在感を高めるのに貢献し、着実にNTの「伝統」を再構築してきた。NTAの知名度が上がるにつれ、徐々にその成果も表れてきたといえる。

その一例を次に述べる。まず、NTAのパトロンでもあるナタラージャンにより、NTを単独で扱ったはじめての学術的研究書が出版された [Natarajan 1988,1990]。

次に、タミルとアーンドラのNT関係者同士の交流が見られるようになった。NTの出身地とされるアーンドラのNT大祭委員会 Sri Narayana Tirtha Yatindra Satguru Swami Aradhana Mahotsava Committeeの関係者が毎年NTAに招待されているほか、近年ではヴェンカテーシャンらがアーンドラに赴き、合同でNTの生誕祭を行うようになった。

さらに、2005年7月16日、330回目の生誕祭を挙行了した記念に、NTの特別封筒が郵政局 Department of Post から発行された [Srutii 2006: Issue263,39-41]。これまでに南インドの楽聖としてはティヤーガラージャをはじめ、4人の切手や特別封筒が発売されているが、いずれも南インドを代表する楽聖が選ばれている²⁹。NTA開始当初は、その存在がほとんど知られていなかったNTが選ばれたことは、特筆に値するだろう。

以上のように、NTAは亜流のアーラーダナーではあるものの、カルナータカ音楽界でNTの存在感を高めるのに著しく貢献したという点で、その意義は大きい。NTAの変遷過程は、楽聖のアーラーダナーが、カルナータカ音楽界に生きる人々のニーズに合致した、時代の所産であることを裏付けているといえよう。

²⁹ ティヤーガラージャ (1961年) やブランダラダーサ (1964年) の切手、アルナギリナートル (1975年)、アンナマーチャーリヤ (2004年) の封筒が発行されている (筆者調べ)。

付表1 インド国内のTA一覧（順不同）

州名	地名	機関名	開始年
タミルナードゥ州	ティルヴァイヤール	ティヤールガブラフマ大祭協会 Tyagabrahma Mahotsava Sabha	1847年
同上	チェンナイ	ティヤールガラージャ・サンギータ・ ヴィドワット・サマジャン Tyagaraja Sangeetha Vidwath Samajam	不明
同上	同上	尊師TA財団 The Satguru Tyagaraja Aradhana Trust	1984年
同上	同上	ティヤールガブラフマ・ガーナ協会	不明
同上	同上	ティヤールガブラフマ信徒協会 Tyagabrahma Bhakta Sabha	不明
同上	同上	マドラス音楽協会 Music Academy ナーラダ音楽協会 Narada Gana Sabha	不明
同上	プドゥコッタイ	プドゥコッタイ芸術協会 Fine Arts Society in Pudukottai	不明
カルナータカ州	シュリーランガパトナ	コーダнда・ラーマ財団 Kodanda Rama Trust	1955
アーンドラ・ プラデーシュ州	ティルパティ	ティヤールガラージャ財団、祝祭委員会 Tyagaraja Trust, Festival Committee	1942
デリー		音楽鑑賞 The Music Appreciation	1983
同上		シャンムカナンダ音楽協会 Sree Shanmukhananda Sangeetha Sabha	不明
西ベンガル州	コルカタ	ラシカ・ランジャニ協会 Rasika Ranjani Sabha	1981

[*Sruti* 1995: Issue126]、[*Sruti* 2004: Issue235]、[*Sruti* 2004: Issue241] および <http://www.hindu.com/2009/01/16/stories/2009011652590300.htm> (2009年5月15日閲覧)、<http://www.hinduonnet.com/fr/2002/07/26/stories/2002072600910400.htm> (2009年4月12日閲覧) をもとに筆者作成。

※複数機関が関係しているものは代表的機関を記した。

付表2 海外におけるTA一覧(順不同)

国名	州名	地名	機関名※1	開始年
アメリカ合衆国	オハイオ州	クリーヴランド	アーラーダナー委員会 Aradhana Committee	1978年
同上	イリノイ州	シカゴ	シカゴティヤーガラージャ祭 Chicago Tyagaraja Utsavam	1977年
同上	オレゴン州、ワシントン州(アメリカ北西部合同)	コーバリス ポートランド シアトル	芸術同好会カラーンジャリ Kalanjali	1991年
同上	ペンシルバニア州	フィラデルフィア	インド音楽舞踊協会 The India Music and Dance Society	1987年
同上	カリフォルニア州	サクラメント	ティヤーガラージャ・ニラヤム Tyagaraja Nilayam	不明
同上	テキサス州	ヒューストン	古典芸術協会 Classical Arts Society	1970年代
オーストラリア	ニューサウスウェールズ州	シドニー	シドニー音楽サークル Sidney Music Circle	1984年
ニュージーランド		オークランド	ニュージーランド・カルナーティック音楽協会 The New Zealand Carnatic Music Society(NZCMS)	1999年
日本		東京	日本インド人会 Indian Community Activities Tokyo(ICAT)	不明

[Srutii 2008 Issue284: pp.14-20] および <http://www.kutcheribuzz.com/kbusa/news/seattle.htm> (2009年3月23日閲覧)、<http://www.classicalartsocietyhouston.org/> (2009年3月25日閲覧) をもとに筆者作成。

※複数機関が関係しているものは代表的機関を記した。

付表3 ティヤーガラージャ以外の楽聖に関連した音楽祭を伴う企画の事例（順不同）

国内の事例					
三楽聖					
州名	地名	祭の種類	機関名	開始年	
タミルナードゥ州	ティルヴァールール	生誕祭	カーンチ・カーマコーティ・ピータ・カルナータカ 音楽奉仕財団 Kanchi Kamakoti Peetha Karnataka Sangeetha Seva Trust	1984年	
ティヤーガラージャとブランダラダーサ					
同上	バンガロール	アーラーダナー	ヴァディラージャ・アーラーダナー財団ほか Srimad Vadiraja Aradhana Trust	不明	
ムットゥスワーム・ディークシタル(出生地：タミルナードゥ州、言語※：サンスクリット語)					
タミルナードゥ州	チェンナイ	奉納祭(Anjali)	民間	不明	
タミルナードゥ州	同上	表敬祭(homage)	バーラティヤ音楽光輝 Bharatiya Sangeeta Vibhavam	不明	
同上	同上	音楽祭	グルグハ音楽学校 Sri Guruguha Vidyalaya (コルカタ)	不明	
ブランダラダーサ (出生地：カルナータカ州、言語：カンナダ語)					
カルナータカ州	ハンピ Hampi	アーラーダナー	カルナータカ州政府	1960	
タミルナードゥ州	チェンナイ	同上	シュリー・ブランダラダーサ信徒協会 Sri Prandaradasa Bhakta Samajam	不明	
アーンドラ・ ブラデーシュ州	ハイデラバード	同上	ブランダラ・ヴィットラ奉仕財団 Purandara Vittala Seva Trust	不明	
同上	ヴィシャカパトナム	同上	カーヴェリー・カンナダ・サンガ Kaveri Kannada Sangha	不明	
アンナマーチャーリヤ (本拠地：アーンドラ・ブラデーシュ州、言語：テルグ語)					
アーンドラ・ ブラデーシュ州	ターッラパーカ	アーラーダナー	ティルマラ・ティルパティ寺院 Tirumala Tirupati Devasthanam	1983	
タミルナードゥ州	チェンナイ	生誕祭	サルヴァニ音楽協会財団 Sarvani Sangeetha Sabha Trust	不明	
海外の事例					
ブランダラダーサ (出生地：カルナータカ州、言語：カンナダ語)					
国名	州名	地名	祭の種類	機関	開始年
アメリカ合衆国	カリフォルニア州	サニヴェール	アーラーダナー	サニーヴェール・ヒンドゥー寺院 Sunnyvale Hindu Temple	2002
同上	テキサス州	ヒューストン	同上	カンナダ・ヴリンダ Kannada Vrinda	1983
アンナマーチャーリヤ (本拠地：アーンドラ・ブラデーシュ州、言語：テルグ語)					
アメリカ合衆国	北部		生誕祭	サブナ SAPNA	1990

			アーラーダナー		年代
オーストラリア	ニューサウスウェールズ州	ヘレンスバーク	生誕祭	ヴェンカテーシュワラ寺院 Sri Venkateswara Temple	不明
合同アーラーダナー					
国名	州名	地名	楽聖名	機関名	開始年
アメリカ合衆国	アラバマ州	バーミングハム	三楽聖と ブランダラダーサ	ヒンドゥー寺院と文化センター The Hindu Temple and Cultural Centre	不明
同上	メリーランド州	フレデリック	ティヤーガラージャと ブランダラダーサ	チンマヤ伝道音楽サークル Chinmaya Mission Music Circle	不明
同上	ミネソタ州		同上	ミネソタ・インド音楽協会 Indian Music Society of Minnesota	1995
同上		ワシントン他	音楽祭	音の波 Nada Trangini	1990年代
イギリス	北ハンプシャー	ベージングストーク	同上	カンナダ・バラガ Kannada Balaga	不明

[*Sruti* 2008 Issue284: pp.14-20]、<http://www.kutcheribuzz.com/news/20061117/guruguhasangeeth.Asp>(2008年10月11日閲覧)、<http://www.kutcheribuzz.com/news/20070427/trinityjayanthi.asp> (2008年11月11日閲覧)、<http://www.kutcheribuzz.com/news/20050318/music.asp> (2008年9月10日閲覧)、<http://www.mypurohith.com/Pilgrimages/Tallapaka.asp> (2009年3月15日閲覧)、http://www.vanimahal.com/sparkling_at_sixty.php (2009年2月15日閲覧)、<http://www.kannadabalaga.co.uk/>、<http://www.svtsydney.org/newsletter.asp>、http://www.geocities.com/nandakishore_v/lotus/Archives/purandara03.htm (2008年11月15日閲覧) をもとに筆者作成。

※主に楽聖の作品に用いられている言語を記す。

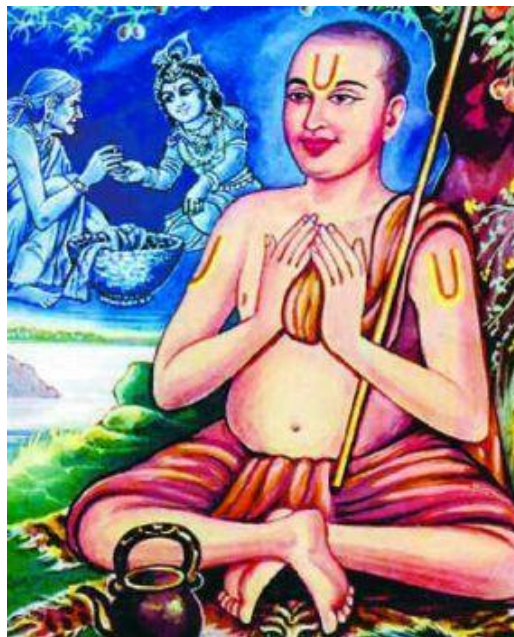
※複数機関が関係しているものは代表的機関を記した。

付表4 NTA年表

年	出来事
1745年?	NT没、村民による祖霊祭?
1965年	ラーガヴァンの提案でヴェンカテーシャンがアーラーダナー実行委員会を発足。儀礼の他、コンサート2つとハリカターを6日間に渡って挙行。
1983年	クリシュナ聖誕祭を開始。
1985年	経済的困難のため、NTAを4日間に短縮。
1986年	ティルプーンドゥルティ NT財団を設立。タミル文学音楽演劇協会とデリーの音楽演劇協会から助成金を受ける。
1988年	3日間に短縮、現在の形式に至る。NT以外の楽聖の曲の演奏禁止。 ヴェンカテーシャン、チェンナイへ移住。スップラクシュミーの出演。
1993年	NT研究者B. ナタラージャン監修のもと、イエスダースがプレイバック・シンガーを務めたNTの13回連続ドラマが国営テレビ(タミル語版)で放送される。
1994年	チェンナイで音楽シーズンに先駆けたタランガム音楽祭を開始。
1993-95年	寺院内にタランガムの石碑を設置。
1997年	タランガム譜の改訂版を出版。
1999年	バジャナのためのホール(ナーマ・サンキールタナ・マニマンダパム)の建設。
2000年	マニマンダパムの2階に宿泊施設を増設。
2003年	タランギニ・マハールを建設、8月18日に落成式を行う。
2005年	生誕祭を記念して郵政局 Department of Post より NTの特別封筒が発売される。
2006年	デリーの音楽演劇研究所から助成金を受ける。
2005-2007年	全インドラジオ放送の導入。

[Venkatesan 1994]、[The Hindu 2003.3.7]、[Srutu 2006: Issue263,39-41]をもとに筆者作成。

写真 1 NT の肖像画



2007 年度 NTA 開催時に贈呈されたプロマイドから。

写真 2 T 村の NT のサマーディに書かれているティールタ・ナーラーヤナの肖像画



2007 年 5 月筆者撮影。

写真3 NTが祀られているとされる寺院にアーディーナムが掲げた看板
(タミル語で「T村のアナンタ・パドマナーバ・ティールタ・ナーラーヤナの土地
— クンドラックディ・ティルヴァンナーマライ・アーディーナムに帰属する」と書かれている)



2007年5月筆者撮影。

写真4 2007年度NTAの様子（ウパンニャーサム）



2007年2月筆者撮影。

写真5 2009年度NTAの様子（ウンチャヴリッティを模した儀礼）



<http://www.kutcheribuzz.com/news/20090321/Tirupoonthuruthi.asp> (2010年12月15日閲覧) から。

写真6 2007年度NTAの様子（ナーマ・サンキールタナ）



2007年2月筆者撮影。

写真7 2007年度NTAの様子（著名歌手イエスダースの演奏）



2007年2月筆者撮影。

参考文献

個人文書

Venkatesan, 1994, V., Profile of Thirupoonthruthy V. Venkatesan.

音楽協会機関紙・新聞など

Sruti: South Indian Classical Music and Dance Monthly, Madras (Chennai): P. S. Narayan on behalf of the Sruti Foundation from ALAPANA.

The Hindu, Madras(Chennai): Kastri and Sons.

音楽祭のプログラムなど

Celebrations of Narayana Theertha Jayanthi, The Institute for Understanding Krishna Consciousness and Sri Narayana Theertha Trust, Secundarabad, 2004.

Zri Narayana Tirtta Svamikalin 259-vatu antu Aratanai Vila, Sri Narayana Tirtha Swamikal Aradhana Utsava Committee, Tirupoonthurutthi, 2007.

332nd Jayanti of Pujyasri Narayana Tirtha Swamigal (Tharangam Music Festival) Sri Narayana Tirtha Trust, Chennai, 2007.

現地語テキスト

Srinivasan, N., 2001, *Katha kalaksēpa Kalaiyum Kalaijargalm*, Chennai: Goodbooks Publications.

Venkataraman, Varahur V. K., and Varahur V. Krishnamurthy, 2003, *Varakur Stala Varalaru marrum Zri Narayana Tirttar Carittiram*, Chennai: Varahur Adittar Vaittiswara Iyer Kuthumbattinar.

二次文献

Achariya, C. R., and Mallika Sarabhai, 1992, *Understanding Kuchipudi*, New Delhi: Indira Gandhi National Center for the Arts.

Gurumurthy, P., 1994, *Kathakalaksepa: A Study*, Madras: International Society for the Investigation of Ancient Civilisations.

- ホブズボウム、E・T・レンジャー（編）、1992、『創られた伝統』、前川啓治ほか（訳）、紀伊国屋書店。
- 井上貴子、2006、『近代インドにおける音楽学と芸能の変容』、青弓社。
- Jackson, William.J., 1994, *Tyagaraja and the Renewal of Tradition: Translations and Reflections*, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- Janakiraman, S., 1995, *Sri Krishna Leela Tarangini*, Madras: A. K. Gopalan Publisher.
- 辛島昇ほか（編）、1992、『南インドを知る事典』、平凡社。
- Krishnamurthy, R., 1979, *The Saints of the Cauvery Delta*, New Delhi: Concept Publishing Company.
- Natarajan, B., 1988, *Sri Krishna Leela Taranagini by Narayana Tirtha*, Vol. I (Tarangams I to VI), Madras: Mudgala Trust.
- , 1990, *Sri Krishna Leela Taranagini by Narayana Tirtha*, Vol. II (Tarangams VII to I X II) , Madras: Mudgala Trust.
- , 1997, “Narayana Tirtha,” *The Journal of the Music Academy*, vol.58, pp.179-188.
- Parthasarathy, T. S., 2006, *Music Composers of India*, Madras: The C. P. Ramaswami Aiyar Foundation, .
- Raghavan, V, 1942, “The Parijatharana Nataka of Narayana Tirtha” *The Journal of the Music Academy*, vol.13, part 1-4, pp.74-76.
- ラーガヴァン、V・（編）、2001、『楽聖たちの肖像—インド音楽史を彩る11人』、井上貴子・田中多佳子（訳）、穂高書店。
- Rangaramanuja Ayyangar, R., 1993, *History of South Indian (Carnatic) Music*, Bombay: Vipanc(h)i Cultural Trust.
- Sahukar, Mani, 1985, *Krishna Leela*, Madras: Somaiya Publications.
- Sambamurthy, P., 1984a, *A Dictionary of South Indian Music and Musicians*. vol.1, 2nd ed., Madras: The Indian Music Publishing House.
- , 1984b, *A Dictionary of South Indian Music and Musicians*. vol.2, 2nd ed., Madras: The Indian

Music Publishing House.

——, 2001, *A Dictionary of South Indian Music and Musicians*. vol.3, 2nd ed., Madras: The Indian Music Publishing House.

——, 2002, *Great Composers Book II*, 3rd edition, Madras: The Indian Music Publishing House.

——, 2004, *Great Composers Book I*, 7th edition, Madras: The Indian Music Publishing House.

Seetha, S., 2001, *Tanjore as a seat of music*, Madras: University of Madras.

Subramanian, K. R., 1988, *The Maratha Rajas of Tanjore*, New Delhi: Asian Educational Services.

菅沼晃、2002、『サンスクリット購読』、平河出版社。